

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00523

研究課題名(和文) 小説コーパスに見る20世紀韓国語の変化に対する総合的研究

研究課題名(英文) A Diachronic and Quantitative Study on 20th Century Korean Novels

研究代表者

南 潤珍 (Nam, Yunjin)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：30316830

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では20世紀の韓国小説コーパスから語彙使用・文法項目の使用の推移を記述することで20世紀の韓国語から今の韓国語に至る過程の一端を明らかにするため、基礎資料の整備と言語現象の変化に関する調査分析を並行して行った。その結果、20世紀韓国語の小説1109篇で構成されるコーパスを構築した。そして各作品から会話文と地の文を抽出した。小説の発表年代、作家の言語背景を調査し、作品の言語特性を調べるための基本情報を確保した。20世紀韓国語の変化および20世紀韓国社会における言語政策・教育・出版の推移に関する研究成果を調査した。会話文の語彙使用の推移を調査した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、話し言葉と書き言葉そして標準語と方言が共存しており、作者の言語的背景や社会・文化的環境が知られているという小説に注目し、その言語変化の要因を突き止めようとする試みである。その点で本研究はコーパス言語学と文学史の学際的研究と位置づけられる。小説という特定のジャンルに限定されるものの、小説テキストにおける語彙使用の変化と文法範疇・文の構造の変化を記述することで言語変化の全体像の把握が期待される。そして頻度のみでなく、作家の出生年代、言語環境、社会情勢を因子と捉え、質的側面をも反映する研究として韓国語コーパス言語学、文体論および韓国語社会言語学の学際的研究として新しい知見の提供ができる。

研究成果の概要(英文)：This research aims to clarify the process from 20th century Korean to present-day Korean by describing the use of vocabulary and grammatical items from a corpus of 20th century Korean novels.

As a result, a corpus consisting of 1,109 20th century Korean novels is constructed. Then, conversational sentences and narrative sentences has been extracted from each work. The novel's publication year and the author's language background were investigated in order to examine the linguistic characteristics of the work. At the same time, research results regarding changes in 20th century Korean language and changes in language policy, education, and publishing in 20th century Korean society were investigated, too. Based on corpus data, the changes of vocabulary usage such as personal nouns in conversational sentences were described and examined relating the social environments.

研究分野：言語学

キーワード：コーパス言語学 現代韓国語 言語変化 小説 文法化 語彙使用

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

韓国語史においては、20世紀韓国語の特徴として以下の点が挙げられている。すなわち、a.正書法の確立と連動した、ハングルによる書き言葉の成立、b.書きことばと話しことばの統合(言文一致)、c.日本語や英語など外国語との接触に触発された文法や語彙の変化、d.マスコミの発達および人の移動の増加による方言差の縮小、e.南北分断による南北の言語の異質化などである。

このような20世紀韓国語の特徴は、1970年代以後の研究によって明らかになったことであるが、ほとんどの研究は、いつからそのような現象が現れ、いつになって確立されたのかに焦点を当てており、a.~e.の20世紀韓国語の特徴がどのような過程を経て21世紀の韓国語につながっているのかを考察した研究は管見の限りまだ十分とは言えない。21世紀も20年以上経った今こそできる研究であるともいえるだろう。

### 2. 研究の目的

本研究は20世紀の韓国小説コーパスに基づき、その語彙使用・文法要素の使用様相を記述したうえ、その変異や変化の要因を作家の言語特性 社会変動の2つの観点から分析し、20世紀韓国語から今の韓国語に至る過程の一端を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究では、以下の作業を行った。

- (1) 20世紀韓国語の小説コーパスの整備：韓国語の小説テキストは、韓国の代表的コーパスである『21世紀世宗コーパス(以下「世宗」)』の現代書き言葉コーパスの公開分、約3700万文節()のうち490万文節を占める。しかし、作品の発表年度や作家の偏りがあるため、小説に限っては、代表性 (representativeness)があるとは言い難い。そのため、本研究では小説コーパスの整備を行う。「世宗」の小説テキストを年代別・作家別に分類し、欠けている年代の資料を補充する。同時に、より多くの作家の作品が含まれるよう、原文テキストを追加・補充し、小説コーパスの規模を増やす。
- (2) 20世紀韓国語の変化及びコーパス分析方法に関する先行研究の調査：上述したように、20世紀韓国語の語彙使用及び文法変化に関する先行研究はとりわけ20世紀初期から1945年までの期間を中心に、その変化が西洋の言語や日本語との接触から触発されたものであるとの観点に立つものが多く、そのような変化がどのように定着していくのかは、それほど注目されていない。本研究はこのような先行研究の空白を埋めるため、まず先行研究の成果を綿密に検討し、本研究で突き止めるべき言語現象を確定する。現段階で想定している項目は、語彙使用においては、a.代名詞など代用語の使用、b.漢語の使用、文法においては、c.2つの否定形式の使い分け、d.主動文と受動文の使用頻度、e.可能・不可能の表現の使用傾向、そしていわゆるf.文法的コロケーションと言われる文末の複語表現の使用である。こうした項目に対し、コーパスから頻度を抽出したうえで、その頻度の意味を解釈しなければならない。単純な頻度から意味ある情報を引き出し、言語学的に妥当な解釈に導く方法を模索するコーパス言語学の成果を調べ、本研究に適した方法論を見つける。現段階で想定している研究は、参照コーパスとサブコーパスの比較に基づく核心クラスター分析、核心カテゴリー分析などがある(Mahlberg(2007), "Clusters, key clusters, and local textual functions in Dickens", *Corpora*, 2(1)).

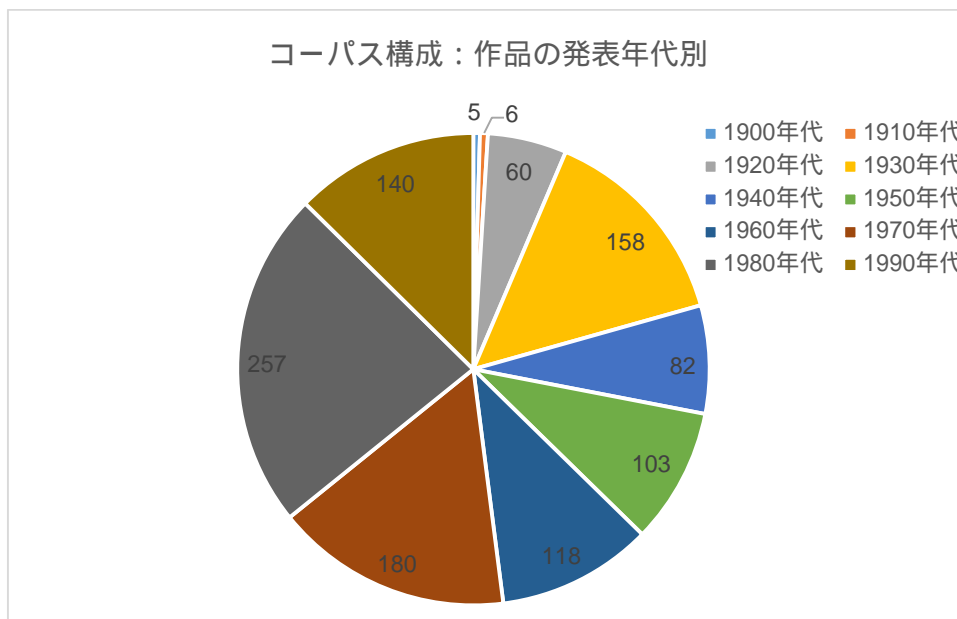
- (3) 小説家の言語環境・韓国社会の言語事情の変化の調査(2021年度後半～2022年度前半): 作家については、出生年代・学歴・方言など小説の言語使用に影響すると予想される作家の属性を調査し、その情報を小説コーパスと紐づける。この作業は現代韓国文学史の先行研究の調査が進める予定であるが、日本生まれ日本育ちの作家や日本で教育を受けた経験がある作家の場合、必要に応じて日本国内での資料調査も行う。作家の言語使用に影響する要素は作家個人の環境だけでなく、社会の変化も密接に関連するという前提で、言語政策や教育制度の変化、出版事情の推移(翻訳本出版など)、マスコミの普及のような社会変動の様子を調べる。社会事情に関する先行研究だけでなく、出版年鑑や放送年鑑などの1次資料の調査をも行う。
- (4) 作家の言語特性・社会変動を反映したサブコーパスの構成(2022年度): で調査した作家の属性、社会変動の年代によって作家別、年代別のサブコーパスを構成する。によって参照コーパスが、このサブコーパスによって対象コーパスが整備されることで調べたコーパス言語学の方法論を適用した分析が可能な環境が整える。
- (5) 小説コーパス全般についての語彙使用・文法変化の推移の調査: 小説コーパス全体の変化を概観するために、言語使用の推移を10年ごとに分けての結果として選定された言語項目の使用頻度を調査する。この調査の結果は参照コーパスの頻度資料として、サブコーパスの頻度との比較に利用する。
- (6) 参照コーパスとサブコーパスの比較: 20世紀小説全体を参照コーパスとし、作家の言語環境・社会の変動と結び付けて構成したサブコーパスと比較しその意味を探る。創作期間の長い作家の場合、その言語使用の推移もあわせて記述し、個人とグループ間の様相の異動をも検討する。

#### 4. 研究成果

##### (1) 20世紀小説コーパスの整備

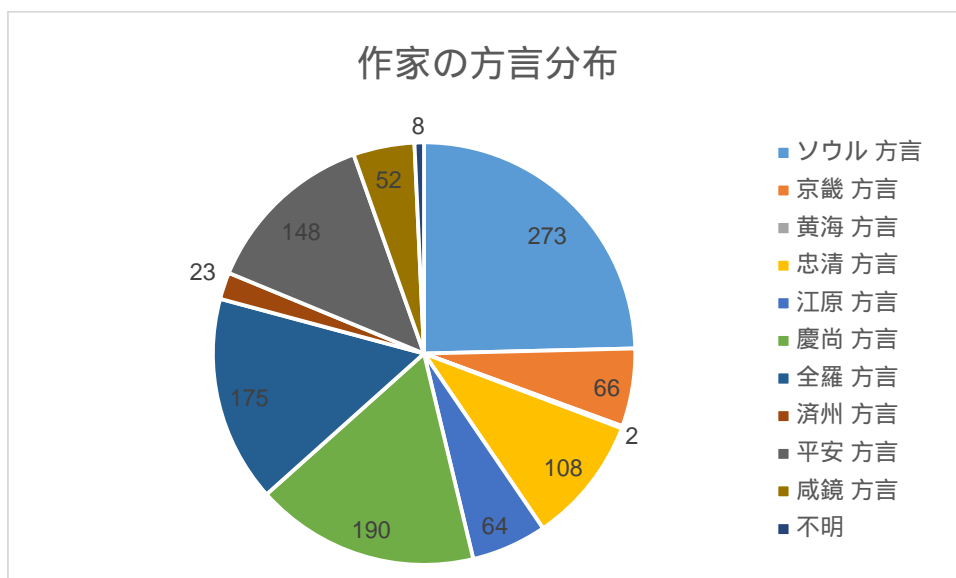
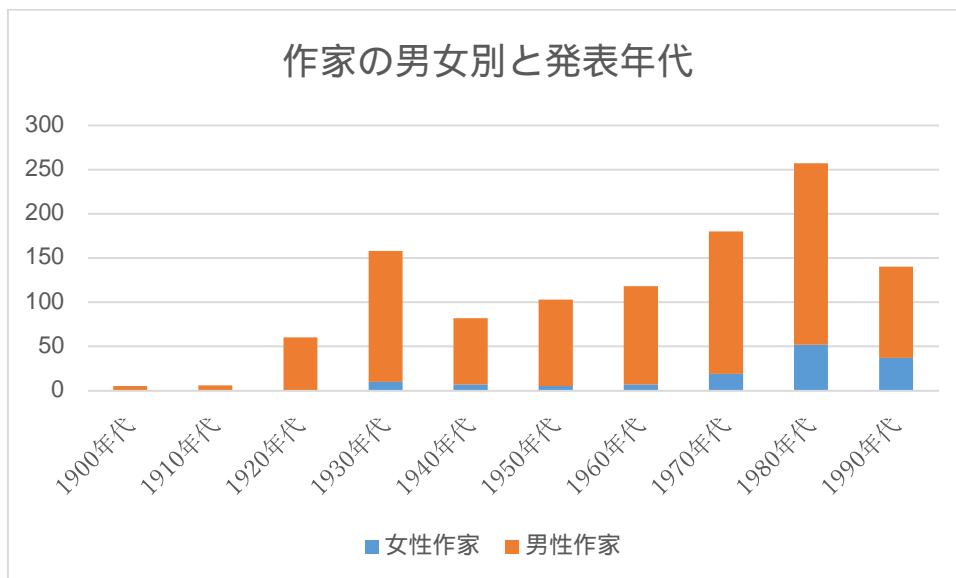
① 20世紀韓国語の小説コーパスの整備: 「世宗コーパス」の小説テキストを年代別・作家別に分類し、欠けている年代の資料を補充するとともに多くの作家の作品が含まれるよう、原文テキストを追加・補充し、小説コーパスの規模を165名の作家の1109作品にまで増やした。そして、各作品のテキストとしての性格をより明確にするために、地の文と会話文を区別する作用を行っている。

作品の発表年代別のコーパス構成をグラフで示すと以下の通りである。



小説家の言語環境・韓国社会の言語事情の変化を調査し、作家の出生年代・学歴・方言など小説の言語使用に影響すると予想される作家の属性を調査し、その情報を小説コーパスと紐づけた。小説コーパス全体の変化を概観するために、言語使用の推移を10年ごとに分けて選定された言語項目の使用頻度を調査に着手した。

作家の男女別、方言別のコーパス構成をグラフで示すと以下の通りである。



## (2) 整備したコーパスから得られた言語学的知見

先行研究に基づき、調査項目として選定した語彙使用のうち、親族名詞の分布および代名詞の分布に関する調査・分析を行った。そのうち、整備されたコーパスの会話文を対象に、「親」を表す親族名詞の分布と用法を調べた結果を提示すると以下のとおりである。

‘父’類と‘母’類の親族名詞とともに[+親密]の‘아빠’、‘엄마’の頻度が増加を見せている。

親ではない人を親族名詞で指し示す虚構的用法においては、‘父’類においては[+尊敬]の‘아버님’が最も多く、その次が基本形の‘아버지’そして[+親密]の‘아빠’である。また‘母’類においては[+卑下]の‘어멈’の割合が最も高く、[+尊敬]の‘어머님’基本形の‘어머니’の順である。こうした事例は、同じく「親」を表す親族名詞であるとしても‘母’

類親族名詞と‘父’類親族名詞が必ずしも同じ動きを見せるとは限らないことを示している。

代名詞を使うことが可能な環境で代名詞の使用を避け、一般名詞を用いる代名詞代用の用法において自称として用いられる名詞としては‘엄마’と‘애비’が特徴的である。会話参与者の間で円満な関係を構築して円滑なコミュニケーションを図るという代名詞代用の戦略的側面から見て、女性は[+親密]を、男性話者は[+卑下]を重視していると解釈できる。

<参考文献>

田窪行則. 1997. 「日本語の人称表現」田窪行則(編)『視点と言語行動』, 13-41. ころしお出版.

谷口龍子, 大久保弥, 野元裕樹, 南潤珍. 2022. 「代名詞代用・呼びかけ表現の多言語データセット」. 『日本言語学会第164回大会予稿集』, 307-313.

南潤珍(2024)「20世紀韓国小説の対話文に現れる親族名詞の分布及び機能について 親を表す名詞を中心に」, 『菅野裕臣先生追悼学術論集』9-27. 銀河出版.

ペ・チニョン, チェ・チョンド, ソン・ヒェオク, キム・ミンクク(2014), 『コーパスに基づいた話し言葉と書き言葉の統合文法記述2名詞と名詞句(原題韓国語)』ソウル: 博而精  
パク・ジノ(2007) 類型論の観点から見た韓国語の代名詞体系の特徴(原題韓国語)、国語学50、ソウル: 国語学会

Nomoto, Hiroki, Ryuko Taniguchi, Shiori Nakamura, Yunjin Nam, Sri Budi Lestari, Sunisa Wittayapanyanon (Saito), Virach Sormlertlamvanich, Atsushi Kasuga, Kenji Okano and Thuzar Hlaing. 2023. Pronoun substitute annotation in seven Asian languages. 『言語処理学会第29回年次大会発表論文集』, 2242-2247

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 福井玲・南潤珍	4. 巻 22
2. 論文標題 李基文先生へのインタビュー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 韓国朝鮮文化	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 南潤珍
2. 発表標題 日本における韓国語文法研究に対する多面的考察
3. 学会等名 国際シンポジウム：発信者としての韓国語文学研究の深化（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 谷口龍子・大久保弥・野元裕樹・南潤珍
2. 発表標題 代名詞代用・呼びかけ表現の多言語データセット
3. 学会等名 日本言語学会第164回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 南潤珍
2. 発表標題 韓国語の人称代名詞及び人称名詞の用法に対する研究-20世紀の小説を中心に(原題：韓国語)
3. 学会等名 2021国語学会・韓国類型論学会共同学術大会（韓国）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------